

## 身近な野生生物と保護

6月に博物館敷地で野良ネコにより傷ついたオキナワキノボリトカゲを保護しました。野生生物の保護においては、このような外敵による捕食などが問題となることもありますので、事例を紹介します。

オキナワキノボリトカゲは沖縄諸島（沖縄島、伊平屋島、渡嘉敷島、渡名喜島、久米島など）や奄美諸島に生息している固有種です。体の大きさは20～30cmほどで、体形はタテに平らな形をしています。尻尾が長く、体全体の2/3を占めます。体色は周囲の色に合わせ、あざやかな緑から茶褐色まで、変化させることができますが、一般的にはオスの体色はあざやかな緑色、メスの体色はくすんだ緑色をしていることが多いといった特徴をもつ生き物です。

オキナワキノボリトカゲの生態は名前のおり、木の上で暮らす樹上性のトカゲで、平地から山地の森林に住んでいますが、民家近くの樹木で見かけることもあります。昼行性ですが、普段は日かげを好み、あまり動かずに木の幹などでじっとしていることも多いです。また、地面に下りてくることもあります。敵におそわれると木の裏側へ回り込むようにして逃げていきます。オスは縄張りを持ち、他のオスが近づくと、腕立て伏せのような動きをして威嚇したりします。エサは動物食で、おもに小型の昆虫類（特にアリ）や節足動物を食べていますが、大型の昆虫類や小型の爬虫類などを食べることもあります。

恩納村では森林が残されているので、身近な場所で見かけることも多い生き物です。博物館や仲泊遺跡周辺でも度々目撃しています。代表的な方言名は「アークー」のようですが、昔から身近な生き物だったということもあり、各地域により様々な方言名で呼ばれています。村内では「クースクエー」などと呼ぶ地域もあるそうです。

このようなオキナワキノボリトカゲですが、現在は沖縄県環境部自然保護課が取りまとめている沖縄県版レッドデータブック「レッドデータおきなわ」では絶滅危惧Ⅱ類になっています。沖縄島では、開発によるすみかとなる林の減少、ペットや販売を目的とした捕獲、外部から持ち込まれた外来種による捕食などにより、生息数が減少しているのが要因のようです。特に野良ネコやマングースなどによる捕食被害が挙げられます。やんばる地域に生息する希少生物が外敵に捕食されてしまうという事例は身近なところでも起こっています。

野生生物を保護していくためには、様々な取り組みが必要になりますが、多くの方に身近な自然環境に関心をもっていただき、野生生物の正しい知識や現状を知っていただくこともその手立てのひとつとなるかもしれません。



参考Webサイト

「沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 沖縄県レッドデータブック」  
<https://www.okinawa-ikimono.com/reddata/index.html>